

【逆風満帆】 心の奥底の気持ち、歌にのせ

ボーカリスト 鈴木重子(上)

(提供:朝日新聞社)

校庭に咲く梅が満開となった3月18日の昼下がり。東京都立八王子拓真高校の小体育館に長身の鈴木重子(48)が姿を現すと、200人を超す生徒から一斉に拍手が起こった。演劇部員が照らすスポットライトを浴びながら、キーボードの伴奏に合わせて静かに歌い出す。

「…Imagine all the people Living life in peace (…想像してみて すべての人が平和のうちに暮らしているところを)」包み込むような深みのある歌声が、会場いっぱいに響いた。この日の歌と講演のテーマは、「心を届ける」。ジョン・レノンによる「イマジン」を歌い終えると、静岡県浜松市で過ごした幼少期の日々を語り始めた。



「小さい頃のことで、一番よく覚えているのは、幼稚園でいじめられていたことです。想像力もなかった幼い私にとって、それは大変なことでした」ままごとではいつも、誰もやりたがらない犬の役だった。首輪をつけられたまま引っ張られ、あやうく窒息しかけたこともあった。「毎日、生きて帰れるのだろうか、と思っていた。子どもの頃の私の望みは、安全でありたいということと、大きくなったらいろんな人たちと友達になりたいということでした」柔らかな語り口でつらかった思いを吐露する鈴木の話に、生徒たちはじっと耳を傾けた。

ジャズシンガーとしてデビューしてから、まもなく20年。「歌うということは、自分の心の扉を開けて、心の奥底の正直な思いを伝えること。聴いてくれる人のことを大事に思うようになり、その思いは劇場の外にも広がっていくようになりました」。紛争地の歌を集め、平和を願う現在の活動にまで話は及んだ。終演後、控室にいた鈴木の手元に、生徒たちの感想が届けられた。「私も5年間、いじめを受けていました。高校生になって、友達がたくさんできて、生きててよかったと思いました」「好きなことをやることで、必要なことや大事なことが見えてきたっていうのは、とても素敵。私も新鮮な時間をすごせました」「めっさ声、きれいだった。おれもあんな風に歌、うまくなりたい」3月末まで3年生の担任だった小笠原春野(51)は、心の内がびっしりとつづられた数々の文章に心を動かされた。昼夜間の定時制を設けている同校には、不登校を経験した生徒を対象にした受検枠(チャレンジ枠)もある。いじめに遭った経験を、鈴木に打ち明けた子が少なくなく、「重子さんの話にも、歌にも、本気さを感じたんだと思う」と話す。おずおずと控室を訪れ、鈴木が朗読したウガンダの元少年兵の話の一場面を絵にしたい、と伝えにきた女子生徒もいた。

■競争に疲れた東大時代

鈴木は1965年、商家の3代目である父幸夫(73)と母厚子(73)の間に長女として生まれた。建築資材の卸業を営む父の仕事で、昼間は母も手伝った。下には弟が2人。日々忙しく大変そうだった母を、子ども心に「なんとかしてあげたい。喜ばせたい」と思っていた。小学校に入ると、テストでいい点を取ればいじめられないことに気づいた。勉強をすることが、居場所づくりにつながった。いい成績を取ると両親や先生も喜び、「さらにもっと」と期待された。

母がいない日中は、遠縁の女性が姉弟3人で留守番する家に来て、「サリバン先生」のように勉強の仕方や生活マナーを教えてくれた。習い事もたくさんした。ピアノ、水泳、そろばん、英語、絵画、書道、茶道、能楽、バレエ……。

いろんな引き出しができたと思う。だが、自ら望んだのはバレエだけだった。おっとりしていたが、泳ぐのも走るのも速く、通知表は常にオール5。県下屈指の進学校、県立浜松北高校に進んだ。高校でも無遅刻無欠席の優等生ぶりは変わらず、もっとやらなくてはという思いに拍車がかかった。「私にとって学校は戦場みたいなところだった。互いの不完全さを認め合い、大事にする余裕がなかったんです」。ランチタイムに女子同士の輪に入れてもらえず、自分の机だけがポツンと外に置かれた時期もあった。

文系の最難関という理由で東大文Iを受験し、現役で合格した。だが、入ってから気づいたのは、さらにこれから熾烈(しれつ)な競争が始まるということだった。弁護士を目指して司法試験の勉強を始めたが、全く興味が持てない。できないのは意志の力が足りず、根性がないからと、自分を追い込んだ。2年留年し、卒業後も2年間勉強を続けたものの、六法全書を開くと吐き気がするようになった。当時住んでいたのは、マンションの9階。「ここから飛び降りたら、もう勉強しなくてもいいんだ、と思うほど追い詰められていました」=敬称略(佐々波幸子)

【逆風満帆】 腰を痛め気づく心身の緊張

ボーカリスト 鈴木重子(中)

鈴木重子(48)が司法試験に挑んでいた20代前半で唯一、生きている実感を持てたのは歌っている時だった。東京大卒業後も弁護士をめざしたが、気持ちが入らない。「心を覆っている靄(もや)が歌っている間だけは、すーっと晴れていった」小学5年で合唱部に入り、高校時代は軽音楽部でガールズバンドを組んだ。身長約170センチで指の長い鈴木がベースを弾き、フュージョンバンドのカシオペアやT-SQUAREの曲をコピーした。大学の音楽サークルでは、ボーカリストを担当。ジャズボーカリスト村上京子(69)のもとで本格的に習い始めたのは、留年した大学5年目からだ。「マンションから飛び降りたら勉強しないでいいんだ」とまで思い詰めた鈴木の様子を電話口で察し、「どこかで歌う仕事を紹介してやってほしい」と村上に頼んだのは故郷の母厚子(73)だった。



東京・赤坂のレストランクラブで歌い始めると、歌の仕事が増えていった。村上の夫はジャズピアニストで、次男はジャズシンガーの小林桂(34)。一家のもとには、大勢のミュージシャンがやってきた。「やらねばならないことを必死にやるのではなく、好きでしやうがないことを一生懸命やる。みんな楽しそうだった」。しばしば終電を忘れて話し込んだ。ライブを終えたある晩、電車で揺られながら小さく鼻歌を歌っていた。

「きょうはこの歌がうまかったな。次のライブではあれを歌おう……」。

ハッと気付いた。いまこの瞬間が幸せなんじゃないか、と。

「それまでは明日の幸せのために頑張ってきた。初めて、いま幸せであることを受け入れたんです」

競争し続ける人生はもうやめよう。

4度目の司法試験は受けないと決めた半年後、大手の音楽事務所に声をかけられた。恵まれたデビューだった。ニューヨークで最初のアルバムを録音した後、日本人ボーカリストとして初めて、ジャズの殿堂「ブルーノート」で歌った。繊細な歌声は時に、声量が足りない、ジャズ向きではないと批評された。だが、アルバムで共演した世界的なジャズ・ハーモニカ奏者トゥーツ・シールマンス(91)に、「きみの歌は本当にきれいだ。髪の毛1本ほども変える必要はないよ」と言われ、大きな支えになった。歌うことで心身を解放したと思っていたが、そう簡単なことではないと痛感させられる出来事があった。3枚目のアルバムを出した1997年秋。くしゃみをした瞬間、腰に激痛が走った。横浜での発売記念ライブの当日だった。共演するピアニスト渡辺かづきに電話で窮状を訴え、車で迎えに来てもらった。

■内側から噴き出した怒り

這(は)うようにして会場に行き、なんとかいすに座って歌った。帰り道、渡辺は言った。「ぎっくり腰は、重子さんがからだにかけている負担が原因で起こっているんじゃないかな」95年のデビュー以来、毎年ニューヨークでアルバムを録音。96年にはNHKで「BSジャズ喫茶」の司会も始まった。「無理をしているように見えた」という渡辺は、当時日本にいた1人のスイス人を紹介した。無駄な力みや癖を無くし、自然なからだの動きを取り戻すアレクサンダー・テクニクの教師だった。「からだ中にどれほど無駄な力を入れていたか思い知らされた」。固まっていたあちこちの筋肉がほどけると、あんなにひどかった腰の痛みがなくなった。だが、忙しさが加速すると、再び心身への負担が増した。2000年に映画「火星のわが家」に主演、「いたよ、すごい人」というコピーで国際電話のCMにも登場した。5枚目のアルバム「Just Beside You」は約15万枚売れ、日本ゴールドディスク大賞をジャズ部門で受賞した。

傍目(はため)には順風満帆に見えたが、内面にはまだ「皆の期待に応えなければ」という気持ちを募らせていた。驚いたことに、からだの緊張がほどけたとき、内側から噴き出したのは「幼い頃から周囲の期待に押しつぶされ、自分が望むことに気づく余裕さえ持てなかった」という猛烈な怒りだった。「ほめられないと居場所がない気がした。いつも心に圧迫感があった」と母にも伝え始めた。「心配のあまり色々言ってきたけれど、そこまで深刻に受け止めていたとは思ってもよらなかった」と厚子は述懐する。レッスンを通して自分の思いに耳を傾けられるようになると、今度は声が変わってきた。練習を重ねるほど声が出なくなるのが悩みだったが、豊かに響くようになり、感情のひだを表せるようになった。唱歌やアイルランド民謡など、ジャズという枠を超えて歌い始めた。「せき止められていたエネルギーがあふれ出てくるようでした」。08年、個人事務所を立ち上げた。=敬称略(佐々波幸子)

【逆風満帆】 命の尊さ、響かせ伝える ボーカリスト 鈴木重子(下)

(提供:朝日新聞社)

雪を頂いた富士山を間近に望む静岡県富士市で3月21日、鈴木重子(48)のディナーショーが開かれた。「メゾン・ド・アニヴェルセル」での公演は、今年で7回目。「また、帰ってこられてうれしい」と、互いの顔が見える関係を礎に仕事を重ねる鈴木らしい言い方で、スタッフとの再会を喜んだ。「テネシーワルツ」「岸壁の母」「上を向いて歩こう」……。円卓が並ぶ華やかな会場で、さまざまなジャンルの曲をゲストの大島花子(40)と披露した。鈴木が作詞作曲した「あなたのそばに」を澄んだデュエットでかかせた後、大島は父、坂本九を11歳で突然亡くした悲しみに触れ、「今日という日がどれほど大切な一日か」と客席に語りかけた。「命の尊さを歌を通して伝えたい、という思いが重子さんと重なっている」と大島は言う。



2008年に個人事務所を設けるまで、鈴木は毎年のようにアルバムを出し、ツアーを続けてきた。独立後はアルバム制作のペースを落とす一方、病院や障害のある子どもたちが過ごす施設などで歌う機会を増やしている。10年には、世界の紛争地で生まれた歌を集めるプロジェクト「Breath for Peace(平和への息づかい)」を立ち上げた。きっかけは、民族紛争が続いたコソボを取材した友人が、川をはさんでアルバニア人とセルビア人の社会が分断された現状を詩に詠んだことだった。「街の子どもたちは、今も夢みている。あの河をふたたび渡れる日が来ることを……」。別の友人がメロディーをつけた曲をライブで歌うと、鈴木自身も戦いの跡を眺めているような気持ちになった。「戦禍に遭ったそれぞれの地で、命を悼み、平和を祈る歌が作られているのでは」と、国際協力機構(JICA)などの協力も得て探し始めた。これまでにイスラエル、東ティモール、ミャンマーなどの16曲を集め、ライブで歌い、インターネットで公開している(http://nantokashinakya.jp/projects/breath_for_peace/)。11年にはアフリカ東部のウガンダを訪ね、反政府武装組織によって少年兵にさせられた若者から話を聞き、一編の物語を書き上げた。

「日本に紛争はないけれど、年3万人という自殺者の数を見ると、心の内戦が起きている状態だと感じています」遠い紛争地で命の瀬戸際を生きてきた人の歌や体験に触れることで、豊かであるにもかかわらず、生きる目的を見失いがちな自分たちも、命の実感を取り戻せるのではないかと。自身もウガンダで話を聞き、ともに歌うことで力が湧き上がってきた。学校などに招かれたときは、少年兵の物語の朗読もするようになった。

■「ポンとはじけ、爽快」

こうした活動の支えになったのが、米国に通って学んだ「非暴力コミュニケーション(Non-Violent Communication)」という手法だ。対立しあう場でも批判や取引はせず、互いが大事にするものを明確にし、つながりを感じながら対話していく。「怒りや悲しみを取り除こうとせず、抱きしめるように味わうことを学び、心の深いところで何を望んでいたのか気づくようになったんです」ぎっくり腰を機に出会った、無駄な力みや癖を無くし、自然なからだの動きを取り戻すアレクサンダー・テクニークを、いまでは教える側にまわった。静岡市のSBS学苑で開く講座には、関西や首都圏からも受講生がやってくる。04年に出た8枚目のアルバムから制作に携わるディレクターの丸山裕美(55)は、「重子さん自身が自由になるにつれて、歌にも無理がなくなり、心とつながる本来の声が出てくるようになった」と振り返る。「世の中にはキンキンした歌声があふれているけれど、重子さんの声は、中低音もきれいに響き、人にやすらぎを与える声。歌い手がリラックスして、初めて聴き手は癒やされるんです」東日本大震災後には「夜、眠れない」という声を受け、宮沢賢治の詩や枕草子の一節を朗読したCDを自主制作した。無駄な力を抜くほどよく響き、美しい声が出る。「ならば自分も無理に変えようとしなくていい」と、短くしていた髪を伸ばし始めたら、天然のウェーブが出るようになった。白髪を染めず、ふだんは化粧もやめた。

「ポンと何かのはじけたように、爽快です」

髪は四方八方に広がり、まるで鈴木自身が枝ぶりのよい、どっしりと根を下ろした一本の木のような。「昔と違うのは同じ志を持つ仲間ができたこと。いまもくじけることはあるけれど、痛みもそのまま受け入れ、波乗りを楽しんでいるような状態が私にとっての満帆」と笑う。30年後、ひと声出した瞬間に命の輝きがありありと伝わるような、存在感と技術を持った歌い手になるのが夢だ。=敬称略(佐々波幸子)